

団長の独り言

11月30日(日)「劇団嫌いの私が！」

劇団ふぁんハウスは今月の5日で27歳になる。

歴史を紐解いてみると劇団が出来た1998年は長野オリンピックがあり、マイクロソフトはWindows98を出し、アップルはカラフルでスケルトンのiMacを出したという年だった。

では、どのような経緯から劇団ふぁんハウスが誕生したのか？あれは劇団ふぁんハウスを立ち上げる2年ほど前、プロの俳優時代お世話になり、参院選挙のスタッフとしてもお仕えした俳優の中村敦夫さんが、「市民参加型の期間限定劇団」を創るとの事で、手伝ってくれないか？と、私に声がかかった。

あの頃の私は、参議院議員秘書の道もなくなり、かと言って、芸能事務所所に所属するって事もせず、気持ちの整理がつかないまま一般人になってはいたけれど、「いつか、きつと！」って思いを持ち続け、大型トラックのドライバー等をやっていたので、「敦夫さんと、また一緒に何か出来る！」ってのが嬉しくて、芝居の内容等やらなんやらは二の次で、二つ返事で「やらせてください！」という返事をした。

そのお芝居というのが、「ラッツ・大蔵省のドブねずみ」というタイトルで、当時の大蔵省の官僚独裁をコミカルなオペレッタとして分かりやすく描いた、中村敦夫さんのオリジナル作品。

私の役回りは、「大蔵省のドブねずみ役」大蔵省の官僚で、おかまのねずみという設定だったので、役作りのしようもなく、イメージと勢いで演じた。

公演は、当時の「新党さきがけ」の都議会区議がプロデューサーとなり、都内10か所(だったかな?)の区民ホールで公演を行った。

その公演の初日だったかなあ？新宿区筆筈区民ホールで行われた日、菅直人さん、鳩山由紀夫さんというのちに総理大臣になられるお二人もお越しになり、かなり大盛況！

その日の公演終了後、ロビーにて、参議院選挙中に面識のあった菅さんや鳩山さんにご挨拶をさせていただき、ふっと私の隣にいる共演者のY君を見ると、白杖を持った数名のお客様が、Y君を取り囲み、衣裳であるマントとか、頭にかぶっている「ネズミの耳」なんかを代わる代わる触りながら、すごく楽しそうにされていた。私は、「見えない人もお芝居を観て楽しむ」という事に心が動かされ、楽屋に戻った際、Y君に「どういう知り合い？」と尋ねると、彼がボランティアとして参加している視覚に障害のある人達でつくる

「朗読の会」のメンバーの皆さんが、揃って観劇に来られたとの事。

その事に興味を示す私にY君が、「今度の日曜日、その会に顔を出してみますか？」と言ってくれたので、「こんな俺でも何か役にたつかな？」っていう思いから、会の会合に参加をしてみたら、近々行う「朗読発表会」の中で、「ちゃんとしたお芝居がしたい」という声がメンバーの女性2名から上がって、話の流れで、私が脚本・演出を担当する事になった。

そこで私は生まれて初めて芝居の脚本を描き、数週間後、「二人芝居」の稽古に入った。

最初はその視覚障害の女性二人が出る芝居の予定だったのだが、諸事情によりおひとりの役者が降板するという事態となり、急遽、私とその降板した役者の変わりに二人芝居に出演する事になって、目が見えない女性と私とで、「あの日のままで」という30分程度のお芝居を行った。

その芝居は意外にも評判が良く、後日、「朗読の会」所属のSさんが、当時私が住んでいた都営住宅の固定電話に電話を掛けてきた。

「平野さん、劇団作りませんか！」

Sさんの突然の申し出にびっくり！聞けば、今回の発表会を終えたあと、「目が見えない人から、芝居を観るのも

好きだけど役者としても演じたい！」って声が結構出ている…という。

「平野さんにお芝居の指導して貰いたいて見えない人がいるんです！」「平野さんの脚本、面白かったです！」

と言っはくれるが、実は私、あの頃は「劇団」ってのが、あまり好きではなかった。10代後半から20代の半ばにかけて、2つの劇団に所属した経験もあったけど、ちゃんとした事務所に入ってから、映画、テレビ、Vシネマの仕事ばかりで、舞台はといえば商業演劇の出演だった。

そんな私の「劇団」に対するイメージは、「人間関係がいびつ」

「チケットノルマがキツイ」

「貧乏を自慢する」

「理屈っぽくて思想を押し付ける」

「テレビドラマを馬鹿にしている」

「スタニスラフスキーとか千田是とか言っ演劇人ぶる」

「アングラ芝居がよく分からん」

「普段からジャージ姿」…。

かなり、いや相当偏見もあったかと思うでも、その偏見がずーっと続いていたので、いわゆる「劇団」ってものに対して、拒絶反応があった。

だから「劇団を創りませんか」って言われても、受け入れる気にはなれなかった。

それでもSさんは、電話を切ろうとせず、「せめて演技指導だけでも…」と、あまりにも一生懸命だったので、根負けした私は、「目的もなくただ演技指導するの
もなあ〜」って思い、「劇団ってのをやって
みよう…：くれぐれも言っておくけど、
1回こっきりだからね」と返事をする
と、Sさんは、視覚障害のメンバーを次から
次へと募り、私とは言えば、敦夫さんの
芝居で共演していたメンバーに声をかけ、
27年前の12月、1回こっきりの「劇団
ふあんハウス」はスタートし、7か月以上
の稽古期間を経て、1999年7月、
日本橋社会教育会館にて、第1回公演
「風に吹かれて」というオリジナル作品を
上演した。

正直、役者のレベルも脚本のレベルも、素
人集団が手探りで創ったもので、舞台セ
ットは平台2枚のみ。
30分程度の作品で、お世辞にも「演劇」
と呼べるような代物ではなかった…。

しかし、その芝居も結構評判がよくて、
新聞、テレビ等にも随分と取り上げてい
ただき、急速、3か月後に赤坂区民セン
ターにて再演！

すると「また観たい！」「演じたい」という
声があり、「もう1回…：もう1回だけ」
とその後にも公演回数を重ね、メンバーが
増えたり減ったりをも繰り返し、何度
も解散の危機もありながらも、やがて、

劇団の姿勢に賛同してくださる多くの
方々の協力とご支援をうけながら、劇
団はどんどんと進化し続け、気付けば
劇団ふあんハウスは27歳。

本当に人生って不思議だ。

まあ、スタニスラフスキーだの千田是也
だのとは縁遠いけれど、劇団嫌いだった私
が、今や劇団活動ってものをライフワ
ークにして、ガムシヤラになっているんだも
んね。

今年4月に板橋公演、9月には京都
府綾部市での公演も大成功し、劇団ふ
あんハウスの勢い止まらず、現在は素敵
なメンバー達とともに、劇団史上最高の
「夏の夜空へ」を創るべく、とつても充実
した稽古を、昨日も今日も繰り返し広げた
のでした。